

# 娘・母関係の物語（六）

山田英美

## 第三部（承前）

### 第九話 お空のうえから

「今日も低空飛行か……」ミルを保育園に連れて行って別れるとき、軽やかに飛んで園舎にむかっていくことなどめつたになかった。ときには保育園に近づくと、道端の電信柱にしがみついて抵抗を示すこともあった。なだめすかして、泣きべそをかくミルを置いてかえるときは、後ろ髪を引かれる\*あの思いを何度も繰り返さなければならなかったのだ。（\*第三部第二話「愛着ということ」参照）

まれに私の休みがとれたときには、保育園を休ませて、動物公園などに車で行くことがあった。どこに行くかよりも、何かにせきたてられるようにムキになっていた車中でのミルの様子が忘れられない。それは、私がミルと同じ年頃に、空襲で逃げまどった思い出を

ふと話したことがきっかけで、それに対して、ミルは、「しつてる、ミーちゃんはまだ生まれてなかったけど、お空のうえから、雲のあいだから見ていたの。ひこうきがとんできたとき、ママがよそのお姉さんとミゾにかくれたのも見えた！」

あゝあ、この貴重な二人の時間に、私はなにを馬鹿な話題を提供してしまったのだろう、と反省したものの、幼子がそこまで、未生の自分と母たる人とを何としても結び付けておかないではいられない深い不安の存在を、果たしてそのとき私は実感していただろうか。

ある朝、ミルの手を引いて保育園へいそぐ道すがら、私はふと村光太郎の詩「道程」の一節―「僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る ああ、自然よ 父よ……」と口ずさんでいた。そして「ミルの前には道はない……」んだものね。」と独り言のようにつぶやくと、

「でも、ヨコにミチがあるよ。」と、幼児は、車の行き交う車道を指さしてびよんびよんはねながら言った。

保育園に迎えに行くときに、庭にあったその子の三輪車を転がしてもって行った。

「「ミーちゃんお帰りなさい」って三輪車もついで来たよ。」と見せると、ミルは目をみはって、

「三りんしゃで来たの？ミチをとおつてきたの？」と顔を輝かせた。無理やりひき離されて、去っていく母親が夕方までどこにいるか、子どもには全く分らない。ぼんやりした白地図の中に、アパートの庭から三輪車の通ってきた道が、その線上を歩いた母親とともにあざやかに描かれた、その喜びであつたらう。愛用の三輪車をこいで嬉々として家路をたどつたその夕は、私も幸せだつた。

## 第十話 現代のイニシエーション

小学校への入学と入学式は、一般には、ライフステージの中で幼児の世界から児童の世界へ移行するイニシエーションとして社会が用意する儀式、いわば現代のイニシエーションといふことができる最初のものであろう。親としてそのことを実感するのは、いろいろな人から「おめでとう」を言われることだつた。

娘といっしょに歩いていると、

「来年は、いよいよ小学校ですか？」「もうすぐ入学式ですね、お

めでとうございます。」と、店のおばさんや、ちよつとした知り合いの人たちから声がかかった。何と「おめでとう」をたくさん言っていただけのだろう。実際には、時間軸のうえを何とか生き延びて六年たった、その年齢の子どもたちがその線上にいるに過ぎないのだが、教育制度が確立して以来、学校で教育されるという世界へ入るといふことで、一つの節目であり、待ち受ける何らかの飛躍の予感が、子どもにも芽生えるのだろう。

「ミルはもう、指しゃぶり、やめるだ（やめよう）。だって、もうすぐ小学校なんだもの。」なめ親しんだ親指を、スポツと口から離してそう宣言したのは、年長児期の年が明けて二月のことだつた。

家族で交わす話題も学校のことが多くなつた。毎朝ちゃんと起きてご飯を食べて、歩いて学校に行く、ママやパパの送り迎えはない、お勉強や宿題というものがある……（小学校に行つたら、宿題ができていいなあ、楽しみだね！）とこれは、私がわざと強調した。

ミルは、一年生になつたら自分で起きるから目覚まし時計を買つてほしいと申し出た。商店街の時計屋さんですぐに手をのばしたものは、くりくり坊主頭のこどもの一休さんが文字盤にもたれるようにしている大ぶりのものだつた。それはいいのだが、全体の色が生っぽい緑色で、私の好みとは合致しない。私はほかの色はないのかしら？とつぶやきつつ物色を続けていたが、ミルは、これがいいと放棄しない。結局は、それを買つた。

こんな場合に親の好みなんかどうでもよい。ことはもちろん分

かっているのだが、何と頑迷で、愚かな者よ！「いいのが見つかったよかったね」と、口では言っているが、敏感な子どもは、自分が見えらんだものが母親も同じように百パーセント気に入ったかどうかということとは、感じ取るものである。それでも、目覚ましの針を七時にあわせて……と、うれしそうに操作していた。

入学式とそれに続く所属学級への移動のときに、ミルの表情をさがした。ところが目が合ってもにこりともせず、極度に緊張しているふうなのは、意外だった。小学校に入るということについて少し刺激を与えすぎたかな？と、反省するも、そういう緊張に耐えてこそイニシエーションとしての意味があるのだなどと理屈を考える、もしかしたらとんでもない親だったかもしれない。

おなじ日、一年生の靴脱ぎ場のところで、目の下に涙のつぶを一つとどめてじつとたたずんでいるかわいい女の子がいた。ちよつと抱きしめたくなるような風情だったが、靴箱に片手をかけていたので、この子もイニシエ（第三章第三話「ひきとり」の「注」参照）……と感じられ、声をかけないほうがよいという気がして、その場を離れたのだった。

## 第十一話 一年生く二年生——こぼればなし——

留守家庭のばあいの低学年児童は、放課後から夕方まで公立学校

に隣接した学童保育所で宿題をしたり遊んだりしてすごす。子どもにとつては、学校にいるときだけではない人とのつながりが体験できる場所でもあった。ミルは、そこでも元気に過ごすことができていた。

「今日ね、ミル、せんせいにほめられたの。F先生にも、学童の先生にも。F先生にはね、『おりこうですね』って。そして『しせいもいいです』って。学童の先生にはね、ミルが『かつて公園に行っちゃだめなんだよ、だって、せんせいがせきにとれないから』って言ったら『よく分かってるじゃない、それだけ分かってくれてると、たすかるわ』って言われたの。」などと、言語表現も豊かになっている。

また、ある日、  
「D先生は、おこりんぼうだよ。『体育着暑いからいやだー』って言うてるよ、『それじゃ、体育やらなきゃいいでしょ！』っていうんだもの。」先生に対する批評も的を得ている。

こんなことの報告もあった。  
「Aくんがミルのことをミンミンゼミーくってしつくく言ったから、Aくんのテーブルマットをミルがふり回したの。そしたら、大きな、給食ののこりいれの中におっこちてしまつてとれなくなっちゃった。ミルのせきにんでしょ。だから、Aくんにごめんねって言つて、買って返してあげることになったの。お願い、いっしょに

買いにいって。」(雨の中をさんざん探して、やっと同じものを買ってくる)

「ミル、もうこんなバカなことしないだ。おかあさん、めいわくかけて、ごめんさい。」

入学後から、「ママ、パパ」を「これから」おかあさん、おとうさんと呼ぶよ。ねえ、いいでしょ。」と宣言して、呼称を時と場合によって自在に変えて使っていた。私たちは相変わらず自分たちのことをパパ、ママといていた。いつの世でも、たいてい子どものほうが柔軟である。それはまた子どもの、親との関係に自由さがある証明でもあろう。

子ども同士の関係でも、人間性が育っている様子(自我の成長)のエピソードが語られている。二年生三学期のある日。

六年生のお兄さんたち三人がサッカーをやつていて、遊んでいた二年生の女の子たちのところにボールがとんできた。手首に当たって、ものすごく痛かった。ボールを蹴った子が「ごめんナ」とあやまった。もうひとりの男の子が、「あーあ、泣けー泣けー」と言った。(意地悪い感じではなく、共感のニュアンスが含まれていたのだろう)女の子は痛かったけど、平気な顔でゴムとびのつづきを早くやろうと友だちに言った。六年生たちは、(それなりに心配していたらしく)ちよつとずつこけの格好をして、安心顔で走っていった。

…と、こういう筋書きだった。

私「すごく痛かった？」

ミ「うん、いまでも痛い。シップしてー。」

私「泣けー泣けー」と言われて、ちよつと泣いた？」

ミ「うん、泣かない。」

私「どうして？ がまんしたの？」

ミ「泣きたいところにならなかつたの。それに、泣くとボールけつた子が困るでしょう。」

## 第十二話 三年生—こころの中であそぶ—

四月某日(月曜日)の記録より

前夜からミルは発熱があり、学校を休む。

ミ「ママ、ミルね、寝ているとき、ものが小さく見えるの。絵とか字とかが小さく小さく見える。ピアノとかも。」

私「ママも子どものとき、そういうことがあつた。やつぱり病気で寝ていたときだったかなあ。」

デジタル時計を枕元において、秒を数えている。時刻をゆつくり数えて、時の進むのに無心に自分を合わせてみるという、そういう落ち着いた時間も、この子には必要だろう。

十二月某日(日曜日)の記録より

朝、寝床の中で目を開けて静かにしている。かわいい様子なので

近寄ると、珍しく

「ママ、そばへ来ないで。いま、この中で遊んでいるんだから。」  
と言う。胸に手を当てて

「このころの中で、ヒョウマやお兄さんやお姉さんやパパやママがいの。ヒョウマは一番下の子（自分）。」

私がそつと離れようとする、

「いいよ、いても。入れてあげる。」

「ミルはいつも、起きたときとか、そういうあそびするサ。」

次第に、自分の内面に心が向いてきていることがわかる。それは活動的に動いているときよりも、病気で寝ているときや、眠りから覚めたときのように、エネルギーが外に発散されない状態のときに著しいようであった。

### 第十三話 かぎっこ

「留守家庭」「かぎっこ」という言葉がよく聞かれた頃だった。三年生からは、学童保育の対象外になる。リボンで鍵を首からぶら下げていて、学校から帰ると一人でドアを開け、家に入る子のことを称して「かぎっこ」と言う。

おばあちゃんに世話してもらっている同級生のSちゃんが、その頃よく遊びに来ていて、放課後は二人でいろんなことをして過ごす

ことが多かった。学校が午前中で終わる日が続いたときには、私が対応しきれないので、

「学校（社会）って、働いてる母親の都合にあうようにはできていないんだものね…。」と嘆息すると、

「でも、「かぎっこ」もけっこう、おもしろいところあるよ。」と、フェルトで縫ってこしらえたというサツマイモやにんじんなどを取り出して見せてくれた。となりからSちゃんも口ぞえして、

「ミルちゃんがつくろつてくれたソックスね、おばあちゃんが縫ったより、はきごこちいいんだよ。」と、ニコニコしていた。

Sちゃんのおばあちゃんは、子どもが台所を汚すのを好まないからか、何も作らせてくれない、と言う。いっしょにお菓子作りなどに誘うと、

「ミルちゃんはいいなあ。粉をまぜたり、クッキーなんかもつくらせてもらえて。」と、心からうらやましそうな声を発していた。

### 第十四話 ウメシユ事件

これもかぎっこに発するできごとである。学校でクラス対抗の音楽会が催されるので、その準備の相談に、おなじ班の女の子たちが、放課後ミルの家に集まった。さよならをする前に飲み物のサーピスのつもりか、ミルが仲間たちに振舞ったのが…。

私が五時過ぎに階段を上っていくと、なにやら騒がしい。娘が玄

関を出たり入ったり一人で騒いでいるのである。

何事かと急いでドアをあけると、廊下に塗りのお椀が一つコロロンと転がっている。その近くにお玉（玉杓子）が転がっている。ミルは半狂乱で、何を言っているのやら分からない。子どもらが集まって相談したらしい部屋に座布団が三枚ほど乱れた形に並べてあった。落ち着かせて、話をつないでいくと、近くの家のNちゃんが気持ち悪いって言ったから座布団しいて寝かせてあげていたんだけど、もつと気持ち悪いって言ったんで、おばあちゃんを（ミルが）呼びに行つて、Nちゃんを連れて帰つた。すこしたら救急車が来て。

つまり甘い梅酒を何杯もお代わりしたNちゃんが急性アルコール中毒の状態になつたらしい。救急車で運ばれたのを見て、ミルの恐怖は極度に達していた。

「おかあさん、Nちゃんのおばあちゃんがあそこに立つてるから、急いで行つてあやまつてきて！」と、叫ぶので、私もとるものもとりあえず、階段を駆けおりた。背後からミルの大声が響く。

「Nちゃんのおばあちゃん、おかあさんが悪いんじゃないからねーミルが自分でやったことだからね！おかあさんをおこらないでねー！」と。見上げるとアパートの四階の狭いテラスから身を乗り出してフェンスに張りついた格好でいる。落ちほしないかと、これにもはらはらしながら、お祖母さんにあいさつをした。

Nちゃんのお祖母さんは意外にも落ち着いていて、おっとりど、

「おたがい留守家庭ですもの……。うちには（梅酒が）ないので、知らないで甘くておいしかったからつて『もういっぱい、もういっぱい』とうちの孫が言つたらしいです。用心のために病院で一晩診てもらうのです、心配しないでください。」と言つてくださった。

どこかで似たような場面があつたような気がした。そう、たしか『赤毛のアン』の物語にあつた！アンたちは、もつと年が上だったが。小学生のミルにとっては、一生忘れられないおそろしい出来事の一つだつたに違いない。（\*ルーシーM. モンゴメリーが一九〇八年に発表した長編小説）

## 第十五話 いえ

「いえ」（ミルが小学四年生のときに書いた詩）

いえは いつも人間をまもる

さむいと思えば いえの中へ入つて あたたまつている  
それなのにわたしは こわくて 一人では いえに入れない

私たちは動くのに いえはピクリとも動かない  
動くときは 地しんの時 ガタガタと動くだけ  
いつでもいえは その場所にいる

いえは ポロポロになつたら こわされる

いえは ポロポロで一生がおわるんだな

なんとなく かわいそうだ

でも こわれた所にまた いえが 生まれるんだな

そして人間がどんだん住むんだ

いえは 人間をまもるんだ

風の日も雨の日も

いえは 入る所がないのかな

ミルが四年生の一年間に書いた作文や詩や童話の感想文などが、担任の先生の指導で一冊のポートフォリオにしてあった。文集の題には「赤い炎」と、子どもの字で大きく書いてあった。

私はこの「いえ」という詩を読んだとき、実にドキッとした。三行目、「それなのにわたしは こわくて 一人では いえに入れない」という箇所には、である。「いえ」というのは「母」とイコールではないのかと、そのとき思ったのである。母（人）不在の家は、がらんとしていってうすきみわるい。母はいても母性不在の状態であれば、同じことだろう。この作文集について、担任教師から保護者の読後感を求められていた。私は「いえ」の詩と、「かわいそうなごんぎつね」と題した新美南吉の童話の感想文について、「自分の気持ちがよく表現されていて深い文が書いているね」とほめている。

文集の最後のページに独特の字体で父親の感想文が書いてあった。

「赤い炎」を読んで

お父さんの知らないうちに、ミルが自分の気持ちや感想をことばでうまくあらわすことができるようになってるのがわかり、おどろき、うれしくなりました。

ひとりで見たいときがあるかもしれませんが、がんばってください。そして、友だちも大切に。  
一九八三・三・九 父

子どもは誰もいない家にこわごわ入ると、今度は家から出られない。せいぜい電話で親とのつながりを確認できるだけである。そんな娘のことが気になるので、たまに今日は午後から休みが取れるからと予告しておいた日には、ミルとしつかりつきあってやろうと、待ち構えていた。

「ただいまー！」と、元気な弾んだ声とともに駆け込んできて、あがり框がまに勢いよくランドセルを投げ入れると、

「いつてきまーす！」とまた駆け出していく。友だちと遊ぶ約束をしたらしい。

「なあんだ、せっかく今日はいっしょに遊んであげようと思ったのに。」と追いかける私の声など、もう届かないところまで行ってしまっている。

そうなのだ、誰かがいると安心して家から出られるのだ。ミルが詩に書いている「いえは いつも人間をまもる」というのは、家は、住む人がいるという状況があつてはじめて「安全基地」として機能

するということをし、子どもが感じ取っていたのではなかったか。

(続)

〈キーワード〉

イニシエーションとしての小学校入学

自我の成長

安全基地